

Tagayasu

Vision Book in Tagajo





Contents

- Page 05 未来を “TAGAYASU”
- Page 07 Tagajo Community Cafe
- Page 21 SPECIAL GUEST × YOU
- Page 28 めばえたもの
- Page 31 TAGAJI CHALLENGER FILE
- Page 37 未来にむけて





文化「culture」の語源は、
ラテン語の「colere（耕す）」
「文化」とは、「社会にまかれた種」
「内に秘めた可能性の種を育てること」ともいえます。

そして、文化に触れる方法の一つが、
私たちの身近にある「本」
本の中にある場所、食、芸術、歴史
本は、新たな文化との出会いをもたらし、触発し、
さらに未知の文化へと導いてくれます。

文化交流拠点となる多賀城市立図書館の開館
日常の中で、
新たな多賀城の文化が生まれていきます。

未来を“TAGAYASU”

自分の「好き」「やってみたい」
を楽しんでいる人は、輝いています。
そして、そんな人たちで溢れるまちは、
元気で明るく、楽しそうで魅力的。

“TAGAYASU”は、多賀城に暮らす人たちの「好き」や
「やってみたい」を応援するプロジェクトです。

土を耕すように、自分を耕す。
多賀城の子どもも大人もいっそう輝くことを願って、
“TAGAYASU”プロジェクトが始動しています。



Tagajo Community Cafe

TAGAYASU プロジェクトのひとつとして、
“Tagajo Community Cafe” が始まりました。

メインターゲットは多賀城に暮らす「若者」。
未知なるチカラを持つ若者が、地域で活躍する人たちに出会い、
刺激され、発見する場をつくっています。

他を知り、自己を知る。
“Tagajo Community Cafe” で
自分を耕した若者たちが、地域で光輝いていきます。

多賀城盛り上げ会議

「多賀城盛り上げ会議」と題し、第1回コミュニティカフェが開催され、多賀城で何か「やっている人」「やってみたい人」「考え中の人」など、様々な立場の人たちが集まってきました。

多賀城で暮らす私たちが、日常で感じる「まちのこと」はたくさんあります。「政庁跡から見る星空がきれい」「多賀城でロードレースをしてみたい」「子どもたちを、思いっきり遊ばせたい」などなど……。そんな、ふとした「まちのこと」をヒントに、コミュニティカフェで出会った人たちが、「多賀城でやってみたいこと」を話し合ってみました。

まちの人が集まり、出会い、気持ちを共有、刺激し合あうことで、イノベーションが起こります。「多賀城盛り上げ会議」でも、新たな出会いによって、わくわくするようなアイデアがたくさん生まれました。今回、参加者の中で起こったイノベーションの芽が、いつか大きな木になるかもしれません。





高田 彩さん

1980年生まれ。宮城県塩竈市出身。
カナダ・バンクーバーのエミリー・カー美術大学卒。
2006年にbirdo spaceをオープンする。
2011年塩竈市功績者感謝状授受。
2015年より塩竈市杉村惇美術館の企画・運営にもたずさわる。

隣のまちから風景を見つめる

高田さんの活動の原点は何ですか？

カナダの美術大学で学生生活を送ったのですが、カナダは歴史的にも若い国ということもあり、同世代の若者たちが“今、僕らが文化を創っているんだ”という意識で活動していたんですね。現在進行形で文化を創る彼らの姿勢や情熱にふれ視点が変化したことから、実践型の活動は始まりましたね。

帰国して、実際の文化を創る活動が始まった・・・。

塩竈市に戻り、個々のアイデア等を表現し共有する物理的空間としてギャラリー（ビルドスペース）を開廊し、実践的活動をスタート。そこに集まる若者たちと得意技や発想を地域で活かす出張ワークショップを展開していきました。地域の魅力や可能性に気づく中で、活動は地域住民と取り組む“つながる湾プロジェクト”や“ガマロック”等に発展していきました。

文化活動の“場”は大切ですね。

“場”は、“関わり合う”ことで個人にとって意味や価値が生まれます。まずは“関わり合える場”が必要であり、多様な価値観が存在しえる多様な“場”が必要と考えています。小さな“場”が結果的に、地域社会にとって影響ある“場”になっていくんですね。

隣のまちから見て、多賀城をどう思いますか。

多賀城は、利便性高く、人口も多く“暮らしやすい”まちのイメージ。土地の物語を引き出す史跡も数多いので、土地とそこで暮らす人々の結びつきを実感できる芸術文化活動を繰り返すことで、まちのアイデンティティや誇りを再構築できそうですね。芸術文化活動は、歴史的視点ではない多様な見方を与えます。多賀城の市川エリアは美しいですね。新たな光を向けたい楽しそう。





Birdo flugas

独特でユニークな活動を行っているアーティストに注目し、様々な交流を図ることを目的にしたプラットフォーム。高田さんが代表を務め、枠にとらわれないアートシーンを生み出しています。




塩竈市杉村惇美術館

塩竈市公民館本町分室を改装し、平成 26 年 11 月に生まれ変わりました。子どもや地域住民向けのワークショップ、音楽イベントなどが実施され、まちの新たな交流拠点となっています。



谷津 智里さん

東京都出身、白石市在住。
つながる湾プロジェクト事務局スタッフとして広報・編集を担当。
ミニコミ紙「蔵王人」編集・執筆、
『東日本大震災後、4年目の語り。』監修・編集。

 原風景を新たな視点でとらえる

地域づくりの原点は、何ですか。

私は東京の都心で育ち、中2で郊外へ引っ越しました。数年後、訪れると生家は超高層ビルになっていて、故郷は跡形もなかったんです。その喪失感が原点。大学では地理学を専攻し、白石市に嫁いできて、自然と人がつくりあげていく風景、文化を大切にしたい、それを共有したいという思いが、地域づくりのためのミニコミ紙『蔵王人』の発行につながりました。

白石人ではなく、『蔵王人』としたのは・・・

白石で生活してみると、生活圏は市町村とは関係なく周辺地域にまたがっていることが分かります。ミニコミ紙の配布地域も蔵王町、七ヶ宿町とまたがっていたので、これらの地域が共有しているものは何か考えた時に“蔵王のふもとで生活していること”だと思い、名前をつけました。

『つながる湾プロジェクト』につながったのは、どうしてですか。

震災後、被災地支援事業のコーディネーターとして関わったのがきっかけで、「地形がもたらす文化圏で考えよう」という発想に共感し、運営メンバーに加わることになりました。外から持ち込まれた事業だったので、最初は反発もあったんですが、松島湾の文化についてみんなで学ぶうちに面白くなってきて「ああしたい」「こうしたい」と盛り上がるようになりました。

『つながる湾プロジェクト』にはどのくらいの人に参加していますか。

大きなイベントだと100人規模のものもありますが、勉強会やワークショップは15人程度でやっています。濃い時間を過ごせて、とても盛り上がります。まずは同じ視点・感性の仲間と場を共有することで、地域で一緒に活動できる人を増やしていきたいと思っています。





つながる湾プロジェクト

「海の文化」を再発見し、地域や人・時間のつながりを「陸の文化」と違った視点で捉え直そうと始まったプロジェクト。谷津さんも、運営委員の一人として日々活動中。




蔵王人

市町村や行政区ではなく、蔵王を共有する人たちをひとつのコミュニティとして発信する情報誌。蔵王が、地域をゆるやかにつないでいることを教えてください。



伏谷 修一さん

多賀城市出身・在住。2006年1月に設立されたT・A・P多賀城設立時の代表者。
市民交流・まちの賑わいづくりイベント「TAGAJI BEER SUMMIT」を多賀城駅前で初開催。

 新しい駅前文化のモデルをつくる

「タウン・アクティベーション・プロジェクト多賀城」を創設したのはなぜ。

昔、駅前にあった長崎屋が閉店してから、それまであった賑わいがなくなっていきました。“何とかしよう”と、商工会が組織を作ってまちづくりに着手。その時の考え方としては、多賀城は白紙から色塗りができるのだから、仲間をつくって、行動を起こそうというものでした。

「悠久の詩都の灯」が開催されるのは、スタート1年後ですね。

賑わい創出のために、屋台村づくり等いろいろやりましたが、勢いだけでは限界があり、周知されることが大切だと気付きました。そこから、多くの人を楽しめる「悠久の詩都の灯」といったイベント企画が始まりました。

メンバーの方はどんな仕事をしていますか。

私は酒屋で、他に農家、大工、電気屋等々いろんな職業の人たちがいます。あとになって映像クリエイターも参加してきたり、やっているといろんな人が集まってきて、お金をかけなくても事業が展開するようになってきましたね。

活動してきて10年、今考えることは。

人口密度が東北一高い。震災にあったことで、地域のつきあい方がコアになっている。今の多賀城には、市民協働のまちづくりができる土壌があると思います。今の時代の文化を今の人たちが創る。どんなふうになったらいいか、どんなふうにしていきたいか、夢を描いて行動に移すことが大切なんだと思っています。





TAP 多賀城

T (タウン) ・ A (アクティベーション) ・ P (プロジェクト) の略。多賀城の賑わい創出のため、立案側と来場側が一体となってワクワク出来る“まちづくり”を目指して活動中。




多賀城ビアサミット

TAP多賀城が主体となって開催されたイベント。まちの人がビールを片手に出会い、語り合うことを目的に開催され、多くの人でにぎわいました。



佐野 美里さん

1987年多賀城生まれ。塩釜女子高等学校卒業後、
2011年東北芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程修了。
専門は彫刻。現在、多賀城市笠神在住。

 地元での表現活動を楽しむ

彫刻のテーマや素材、制作方法について教えてください。

女性の愛らしさやたくましさや犬の形に落とし込み表現しています。素材は楠（くすのき）で、丸太の状態からチェーンソーや鑿（のみ）を使って彫り出しています。

彫刻家になろうと思ったきっかけは何ですか？

きっかけは、小学生の時に担任の先生が私の描いた絵を褒めてくれたことです。階段の踊り場に掲示してくれたことがとても嬉しく、自信につながりました。中学、高校は美術部に所属し、粘土やダンボールなどで立体作品を作るようになりました。大学に進学してからは様々な素材に触れましたが、木彫による表現方法が自分には合っていると考え、現在も制作を続けています。

いつ制作するのですか。

期間は… 支援学校で講師の仕事をしているので、制作の時間は、平日の夜7時～10時くらいと土・日です。作品によりませんが、大きい物だと2ヶ月かけて作ります。これしか時間がない、ではなく、こんなに時間がある!と思って制作をしています。

彫ることと、その環境に関係はありますか。

大学院を修了して多賀城に戻って来てからは、栗原市、塩竈市、仙台市にアトリエを間借りして制作してきました。その土地でしか味わえない空気感や、そこに暮らす人の営みを観察し、作品に取り入れてきました。また、彫刻の制作過程で生まれる木っ端を使った造形ワークショップ（多賀城小学校）では、地域に住む親子に楠（くすのき）の感触や匂いを体感してもらいました。

故郷、多賀城についてどう思いますか。

改めて土地の歴史を学ぶことで、ますます好きになっています。芸術活動を通して、多賀城の魅力を伝えていけたらと思います！



MISATO SANO EXHIBITION



10.11(sat)-10.26(sun) 11:30-17:30 birdo space 

She is lovely

佐野さんの初めての個展。佐野さんの彫刻作品が多くの人たちと出会う場となりました。2015年夏には、自身2度目の個展となる“Say Hello!”が開催されています。



Coppa!

木を彫るときに出る「木っ端(こっば)」をつかった佐野さんの造形ワークショップ。カラフルな木っ端から、自由なイメージが膨らみ、子どもから大人まで楽しめます。



豊嶋 純一さん (右)

1983 年生まれ。東北大学大学院工学研究科都市建築学専攻プロジェクトデザイン学修了。特定非営利活動法人都市デザインワークス所属。

いのうえ 佳代子さん (左)

1979 年仙台出生。自由学園、御茶の水美術専門学校卒・事務を経て、2010 年帰仙。同年 8 月にギャラリーチフリグリをスタート。

「好きなこと」でコミュニティをつくる

月1で呼びかけている、ピクニックの目的は。

豊嶋/もっと気軽にまちと関わろうと、“ピクニック”というキーワードをもって広瀬川エリアから街中エリアまで、まち探検を始めました。みんな三々五々集まり、気の向くままにランチする、ボートにのる、突然、紙芝居をする…するとコーヒー淹れる人が出てきたり車で本を持ってくる人が来たりと、回を重ねるごとに、関わる人もエリアも広がっていきました。

まち探検から見えてきたことは。

豊嶋/探検しながらも地域に昔から暮らす人の話を聞きます。まちの情報・歴史などを話す際に、ピクニックや探検をする中で感じたことを伝えと、意外にもオモシロイネと返ってくる。歴史の層の重なりを肌身で実感することを通じて、地域の遺伝子が次の世代に伝わっていけばいいと思っています。

ギャラリーチフリグリ5年の活動は。

いのうえ/作品をつくる人と見る人を近づけることを大切にしながら、ライブ、ワークショップ、さらにはワイン会、薪能等々、ギャラリーができることを模索しながら活動してきています。

アートに人々を巻き込んでいくために意識していることは。

いのうえ/仙台でやる、という作家さんには思いがあります。それを心地よく共有できればと、地域の他のギャラリーと連携して無審査の公募展を行っています。

アートとまちづくりのこれからは。

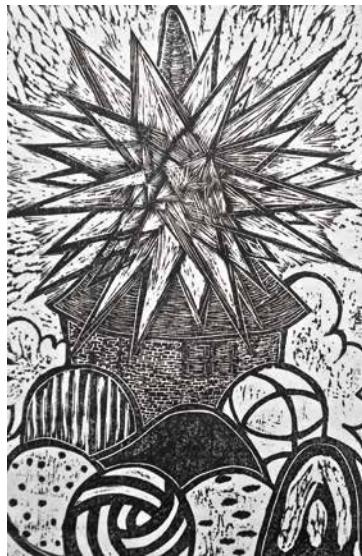
コメンテーター 東北文化学園大学・志賀野教授/文化芸術基本法ができ、日本でもまちづくりにおけるアーティストの活躍の場ができていくことでしょう。これから、多賀城資産に面白いことが起こることを期待します。



そらのしたで
“まち”あわせ

せんだいセントラルパーク

仙台の中心を流れる広瀬川流域で、都市と自然、歴史、人の多彩な出会いを生む活動を行っています。いつもと違った視点でまちを見つめるきっかけに。
(豊嶋さん)



ギャラリーチフリグリ

作品〈版画・絵画・写真・造形〉の発表の場として、またワークショップ〈教室・パフォーマンス〉や映像・音楽・ダンスなど、地域の人と人が出会うフリースペース。(いのうえさん)



SPECIAL GUEST × YOU

「一人一人の幸せが集まって、まちの幸せになります。」

あるゲストがこう語りかけた。

幸せを探すため、

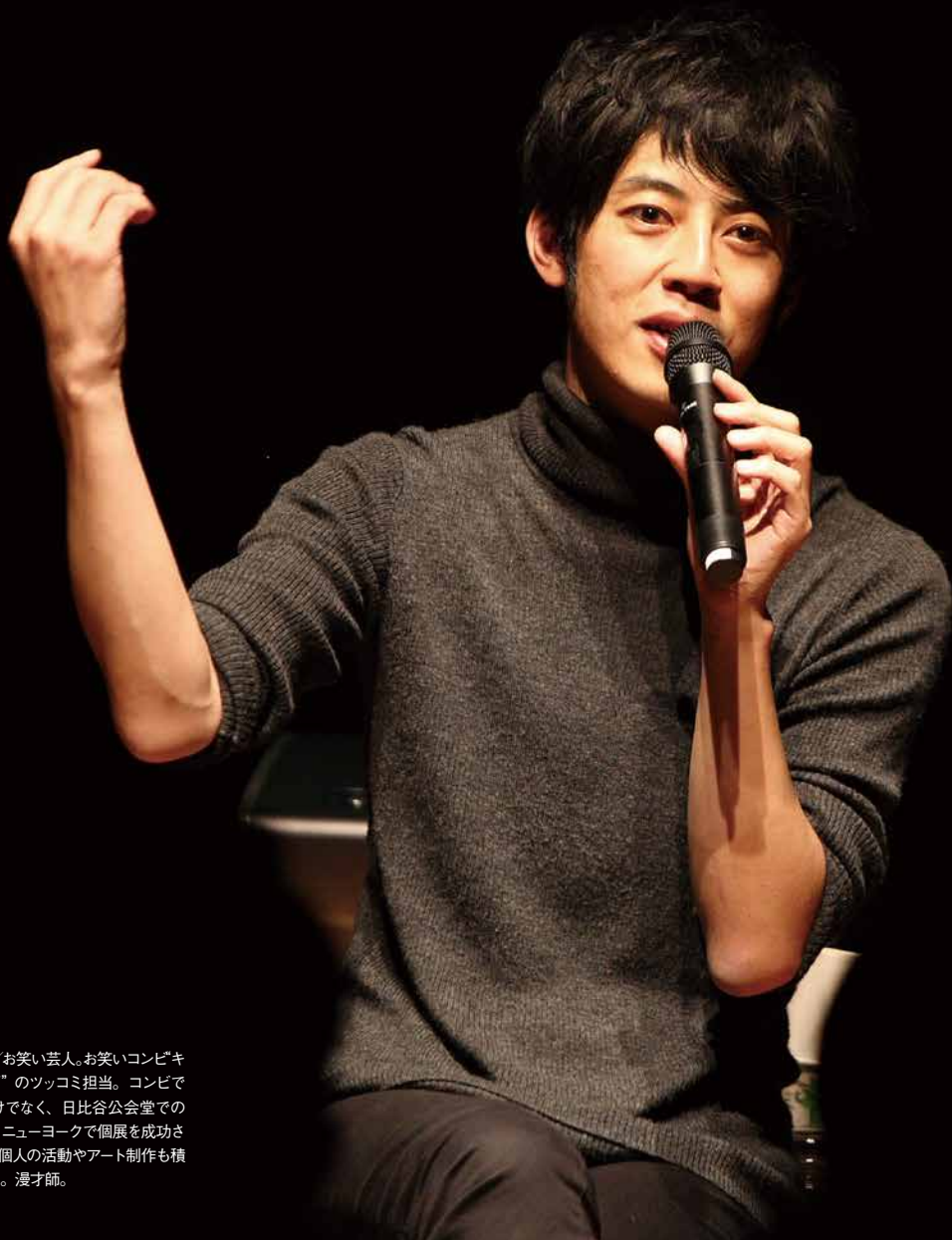
目の前の宝を見つけ、磨く。

未来を“TAGAYASU”ための言葉が

一人一人の心に焼きつけられていった。

誰もやらないことをやる
見たこともないものを創る
挫折からの挑戦

西野亮廣さん / 絵本作家・お笑い芸人



profile

絵本作家 / お笑い芸人。お笑いコンビ「キングコング」のツッコミ担当。コンビでの活動だけでなく、日比谷公会堂での独演会や、ニューヨークで個展を成功させるなど、個人の活動やアート制作も積極的に行う。漫才師。

思い描いていた舞台に立ちながらスターになっていない自分がいた

西野さんの話は、集まった人々の期待を裏切ることがなかった。

「19才でキングコングを組み、1年で漫才の賞をとり、その後もとりまくった。あー、天才だと思いました」。25才、ゴールデンタイムの番組『はねるの扉』などテレビの冠番組を何本も持っていた。が、思い描いていた舞台に立ちながら、なりたかったスターになっていない自分がいた。

そこから、テレビはやめると周囲に話し、1ヵ月間飲み歩く。ある深夜、タモリさんに呼び出された銀座のバーで、とんでもないことを言われる。「絵を描け。お前の性格は向いてるから」。最初は嫌だと断ったものの、話しているうちに物語を創ることが決して嫌いじゃないことに気づく。

何かひとつ、勝てないか ものごとを考えるようになった

伊東屋で0.03の最も芯の細い鉛筆を買い、その夜から始めた。ひたすら描き、絵本を出そうと決めた。「ここからものごとを考えるようになりました。プロには真っ向からでは勝てない。何か一つ勝てるものを、と考えたのが“時間”があるということでした」。そして、5年の歳月を費やして1冊目『Dr. インク』を発行した。「3万部しか売れず、絵

本としてはヒットですといわれても、うわあーと思いましたね」。3冊目を出す時、また考えた。売る作業を人に任せず、届けてあげる仕組みをつくらうと、ネットで全国に原画展の原画を貸します、と呼びかけた。「考え方としては、作品にはお金は出さないが、思い出のおみやげにはお金を出すということです」。原画展会場で絵本は売れた。同じことをニューヨークでも実現させた。そこには、クラウドファンディングでの資金調達という方法も用いた。「クラウドファンディングもそうですが、1対1が効きます。23才からやっている独演会もチケットを手売りしたら、以前にはなかった満席が続いています」。

見たこともないものを創りたい

今は4冊目で、分業制の絵本づくりに取り組んでいる。「今まで、なぜなかったといえば、お金がかかるから。そこでまたやっちゃおう」と、1013万円をクラウドで資金調達した。

絵本の他に、学校づくりにも取り組む西野さん。「世界中の人が見たこともないものを創りたい」と、足元を見、周囲を見渡しては次の山へ向かう。その足取りは参加者にとってインパクト大であった。トーク後、高校生から50代までさまざまな角度からの質問に、快答がくり広げられた。

ゼロからの発想としくみづくり 高校生を活かすことが まちを輝かせた

岸川政之さん / 百五銀行 まちの宝創造アドバイザー



profile

1957年8月15日生まれ。大学卒業後、1982年多気町入庁。税務課、教育委員会、総務課、企画課、農林商工課などを経て、2011年4月「まちの宝創造特命監」に就任。高校生レストラン「まこの店」やその先輩が運営する惣菜とお弁当の店（株）相可フードネット「せんばいの店」など、コミュニティビジネスの手法を取り入れた地域おこしに取り組む。これらの取り組みは、国土交通省ふるさと手づくり賞大賞、総務大臣優秀賞など多くの賞を受賞し、2011年5月からは「高校生レストラン」と題しテレビドラマ化もされ話題を呼んでいる。

まず、多賀城高校へとおもむいた

『高校生レストラン』と題し、テレビドラマ化もされた三重県多気町の地域おこしに取り組んできた岸川政之さん。「きみたちに会いたかったよ」と、多賀城高校では10代の柔らかな心にたくさんの言葉の種を蒔いた。「いい大人になってほしい。いい大人の定義は自分で見つけてほしい。ありがとね」。そして、この会場にやってきた。

夢を未来につなげる“場”を創りたかった それが、高校生レストラン

穏やかな口調のままに、高校生レストラン誕生の経緯を、ビデオを交えて話す岸川さん。多気町は山間の小さな町で、相可高校は普通・農業土木・食物・農業の4学科をもつ高校である。高校生たちが学校を卒業し、一転して社会に入って“場”を見つけられないまま、離職してしまう現状。「夢を未来につなげる場、受け皿を創りたかったんです」。

多気町とは〈気=食べ物〉がたくさん採れるところであり、町の農作物の普及と高校生を鍛えて社会に送り出すことを目指して、高校生レストラン『まごの店』を立ち上げることに。学校がない土日祝日に店をオープンさせるため、高校生たちは朝6時に集まる。髪型もケータイも、規則は高校生た

ちが決めた。料理の道を行くという15才の子のために、15才で建築を目指した子たちが設計し、それを回りが支え、支えられる子どもたちが地域を支えていった。オープンまでは9000万円の補助金があったが、それ以後は補助0で利益を出している。「私自身、高校生に惚れこみました。子どもたちはいろんな物差しを持っている。それを誇りがもてない方向に使うか、それとも活かされ誇りが持てるようになるか」。卒業生の離職率は50%から5%になっていた。

どうしたら幸せになれるか、考えていきましょう

岸川さんは、廃校寸前の高校を4つの方法で発展的に残す提案ができるという。廃校が決定していた北海道のある高校は、岸川さんが関わったことで道内トップクラスの人気校になった。

ユニークな地域おこしで成果をあげている岸川さんは、最後にこう結んだ「人口が減ってみんなおびえています。都会の情報に流されないようにしてください。一人一人の幸せが集まって、まちの幸せになります。自分の幸せ、まちの幸せについて考えていきましょう。私たちは、幸せになるために生まれてきたのですから…」。

自分の場所で、大切なものを撮る 映画づくりという作業で 自らの境界を越え、国境を越える

河瀬直美さん / 映画作家



profile

映画作家。生まれ育った奈良で映画を創り続ける。1997年劇場映画デビュー作「萌の朱雀（もえのすざく）」で、カンヌ国際映画祭カメラドール（新人監督賞）を史上最年少受賞。2007年「殯の森（もがりのもり）」で、審査員特別大賞グランプリを受賞。2009年には、カンヌ国際映画祭に貢献した監督に贈られる「黄金の馬車賞」を受賞し、2013年には日本人監督として初めて審査員を務めた。2015年1月、フランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」を叙勲。映画監督の他、CM演出、エッセイ執筆などジャンルにこだわらず表現活動을続け、「なら国際映画祭」ではエグゼクティブディレクターとして奔走中。最新劇場映画「あん」は大ヒットを記録中。

公式サイト：www.kawasenaomi.com
ツイッターアカウント：@KawaseNAOMI

20才、自分の作品をつくる道を選ぶ

奈良からかけつけてくれた世界的な監督・河瀬さん。姉妹都市である多賀城の政庁跡を歩いた感想を、「碑に刻まれた〈西〉や〈天平〉の文字に巡り巡った縁を想った」と話す。その前には、若者を中心に人々の真剣なまなざし。

20才の時、映画の専門学校を卒業するが、お金も才能もないと思ったから就職。講師として学校に戻らないかと誘われたが悩み、周囲の大人に聞いて回った。今いくつ？ 20才ならやりたいことやればいいじゃない、やり直しがきくんだから。そして、23才で初めて自分の作品をつくる。映画『につつまれて』の映像を見ながら、語られていく。

生まれ育った奈良を大切に作る

『につつまれて』には、存在を知らずに育った父親との初めて取り交わした言葉が記録されている。「私は養父母に育てられました。おじいちゃんおばあちゃんと呼んでいましたが、その祖父母世代から日常を通して学んだことが創作の原点です」。

カメラを通して父に会うことができ、そして一步を踏み出した人生。上映後、自分を取り巻く状況が変わった。「私を認め、周りの人が対話したいと思ってくれた。これが映画をつくり続ける指針となりました」。

2作目『かたつもり』は、もっと大切なものを撮ろうとした作品。愛おしむまなざしの先はおばあちゃん。カメラを回しながら、大切なおばあちゃんのほほに触れる。おばあちゃんから生活する上で大切なことをたくさん教えてもらった。「それが、今、ふるさと奈良での暮らしにつながっています」。

『かたつもり』ができたと思った瞬間、自分の中から湧いてくるものがあり、『萌の朱雀』へと導かれた。人間が何を大切に思っているかを描いた作品

だったが、地味で日本のマスコミは振り向かなかった。カンヌ国際映画祭で受賞したことで、日本公開となった。日本人の評価が海外の評価に影響を受ける。信じられるものがなくなって、地に足がつかない状態が10年続いた。そしてやっぱり自分の場所で、自分の大切にしたいものを撮ろうと考えた。

地元で、日常に添った映画現場 “みんなで”という形ができていった

92才の養母の介護と、2才の息子の子育ての大変な中があったが、その時の日常をみんなに支えられながら、1年かけて完成したのが『殞の森』。「自らつくってしまった境界線を、“みんなで”乗り越えることができた作品。だから、カンヌでのグランプリ受賞の時は本当に嬉しかった」。

2011年3月11日以降、自分の手のひらの上にあるものを大切にしたいと、仲間とともに畑仕事にいそしみ、2013年には、『なら国際映画祭』を起こした。「TAGAYASU・・・すばらしいですね」と話す河瀬さん。会場からは次々と手が挙がり、自らの経験によって磨かれた珠玉の言葉が若者たちに返されていく。

「私も20才の時、自分の作品を撮るか、それとも決められた仕事としての映像を撮っていくかの岐路に立たされました。後者は70点の作品を創ればいいが、自分の作品は0か100かのどちらかではない。その時、0のどん底に足がついたら逆に蹴上ることができる、と思いました」。

さらに、河瀬さんは続ける。「あきらめないこと、やり続けること。20代の時に教えられた言葉ですが、“桜の時期に柿を食べたいと言っても食べられない。けど、柿の時期は来る”ということです。そして、時がくるまで、人様に見えないところで努力することが大切、と若い人たちを励ました」。

めばえたもの

SPECIAL GUEST × YOU の参加者から寄せられたさまざまな想い。その一部をご紹介します。

西野亮廣さんからめばえたもの

- 西野さんの「自分はどうしたいか」という視点からのアクションに感銘です。ビリビリきました。
- 熱い方でびっくりしました。その熱さを、共有できた気がします。
- 「芸人」というカテゴリーではなく、「西野亮廣」という人間そのものの魅力で生きている人だと思いました。

岸川政之さんからめばえたもの

- 地域を知ること、愛することで、初めて動くことができました。
- 地域に何もなかったと思っていたが、それは幻想で実はたくさんのものであるということを知りました。

河瀬直美さんからめばえたもの

- 映画監督として、母として、そして奈良に生きる人として、ちゃんと生きている姿に励まされました。私も、河瀬さんのようになりたいと思いました。
- やめない、あきらめない、時が来るまで待つ。今日からじっくり、自分を耕していきたいです。



「何か」がめばえたあとに
見つめる日常は、
いつもと少し違うかも。



TAGAJO CHALLENGER FILE

多賀城で挑戦する人たちがいる。
足元を耕し、自分の思い描く未来を形にしようとする日々。
もがきながらも前に進もうとする
二人のチャレンジャーに話を聞いた。

生まれ故郷でそこに住む人との 関係性を感じながら作品をつくる

佐野美里さん（彫刻家）



1



profile

1987年多賀城生まれ。塩釜女子高等学校卒業後、2011年東北芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程修了。専門は彫刻。大学院修了後、県立古川支援学校で講師をしながら地元を拠点に精力的に制作を行う。新潟県越後妻有地域で開催される世界最大規模の国際芸術祭「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ 2012」に出品、その後も「POWER of LIFE photo exhibition MIYAGI」(2012 / ビルドスペース / 塩釜)、「GAMA ROCK FES」(2012,2013 / 塩釜)、「クライシスチャーチ×センダイ協働企画展 SharedLines」(2013/ カンタベリーミュージアム / ニュージーランド)「若手アーティスト支援プログラム「Voyage」佐野美里彫刻展 Say Hello!」(2015/ 塩竈市杉村惇美術館 / 塩釜)、「のけものアニマルーきみといきる。」(2015 / はじまりの美術館 / 福島) など、東北を中心に発表多数。現在、多賀城市笠神在住。

(写真)

1.2.4.5.6.7. 若手アーティスト支援プログラム「Voyage」佐野美里彫刻展 Say Hello! 会場風景 Photo:Kohei Shikama ©SHIOGAMA SUGIMURA JUN MUSEUM OF ART 3. 展示会メインビジュアル「甘噛みサルーキ」(2015)

子どもの頃から工作が好きだった佐野さんは、地元の高校を卒業し、東北芸術工科大学へ進学します。そこで、木目表現に感性を刺激され、自分の内なる思いを木彫り作品で表現することを専門的に学びました。大学院卒業後に生まれ故郷の多賀城へ戻り、特別支援学校で講師をしながら、作品の制作と発表を続けています。佐野さんの作品のモチーフは、一貫して「犬」です。「女性のしぐさや体つき、最近では女性の精神的な強さなど内面的なことにも関心を持っています。それらを表現する方法として、犬というのが自分の中で一番しっくりきました。」と佐野さんは話します。

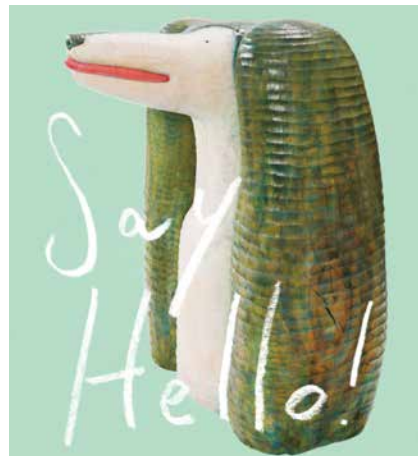
「愛情を傾けながら彫り続けると、木への感謝の気持ちが湧いてきます。」佐野さんは木を彫り始めるその瞬間、全身全霊を込めるそうで

す。佐野さんは、出来上がった作品を「家族」と呼びます。創ることのできる幸せが、出来上がった木彫りの作品に、家族のようなぬくもりと心地よさを与えています。「自分の『家族』が誰かの日常にあって欲しいです。」佐野さんは、自分のもとを旅立っていった作品が、他の家族の一員として迎えらるることに幸せを感じるといいます。

現在、佐野さんは新たなアトリエづくりに挑戦しています。友人たちと協力して、自分の住んでいる地域の人たちが気軽に訪れることができる場にしようと、オープンに向けて準備を進めています。つくる過程を地域の人に見てもらうことで、地域とアート、人とアートをつなぐアトリエづくりが夢、と佐野さんは未来を見つめます。



2



3



4



5



6

森のようちえんを、 東北に、多賀城に根付かせたい！

清水冬音さん（森のようちえん 虹の森）

清水さんは大学院生の時に、東日本大震災の被災地支援ボランティアとして初めて東北を訪れました。大学院で「森のようちえん」と出会い、研究と実践を重ねていた清水さんは、修了後、この活動を広めようと宮城の地に引っ越ししてきました。ボランティアをきっかけに宮城とのお縁が生まれ、継続して関わりたいという気持ちが芽生えたそうです。

「森のようちえん」とは、自然体験活動を中心とした幼児教育で、大人が決めたルールではなく、子ども自らが考えて行動することを教育方針に打ち出しています。「大震災を体験した

東北は、その体験に基づく新たな価値観を得たはず。震災などの予測不能な事態に対して、自分の力で考え行動する力を育む、という教育がとても大切なことだと思いました。」と清水さんは話します。

清水さんのこれからの目標は、多賀城で毎日「森のようちえん」を開くことです。「森のようちえん」の活動を通じて、多賀城の子どもたちが地域の自然に触れる機会も増えます。子どもたちが多賀城の自然を見つめ、感じる場をつくるために、清水さんの活動は続きます。



1



2



3

(写真)

1.木のうろに開いた穴をのぞいて、自然のものがおもちゃに。2.木の枝でトンネルを作ると、何回でもくぐることもたち。3.頭も体も使う木登り。登れたときの達成感も大きいです。4.季節ごとに様々な木々が楽しめる多賀城。キンモクセイもいい香りでした。z



4



profile

1988年生まれ、神奈川県育ち。明治大学大学院農学研究科修了。大学で里山の自然と人との関わりについて、大学院で森のようちえんについて学ぶ。大学院在学中、東日本大震災のボランティア活動で宮城県を訪れたこときっかけに、宮城県で就職。2015年より、森もあり、広々としたはらっぱもある多賀城を、フィールドの中心として活動中。おすすめの多賀城にまつわる本は、『火怨（高橋克彦：著）』



未来にむけて

Vision Book in TAGAJI TAGAYASU は、
自らのチカラを呼び起こす、いわば行動促進本。
読む人の心を刺激して、自分のチカラで未来を創る。

キーワードは「未来を TAGAYASU」
未来は目の前の宝を磨くことから始まっていく。

若い人たちが集まって、どういう方向へ行くのか、楽しみに思って Tagajo Community Cafe に参加しました。市民の活動は、その人その人の個性の反映です。ロダンは、「私は何も発見していない。全て再発見している」、また「肝心なのは感動だ」と言っています。感動を自己表現することが大切ですが、日本人にはこれがありませんでした。

皆さんが輝くことが大切です。市民の時代が来て、行政を動かし、地域を輝かす—地域を愛しつづけていくことが地域を輝かせます。

多賀城市は政庁跡のような史跡が多く残り、美しい風景が広がる素晴らしいまちです。皆さんが少し行動するだけで、10年後、100年後は大きく変わります。



宮城大学 風見正三 教授

ここから、はじまる…

発 行：多賀城市

編 集：特定非営利活動法人せんだい・みやぎ NPO センター

協 力：多賀城盛り上げ会議

多賀城市市民活動サポートセンター

宮城大学風見正三研究室

発行日：2016年3月

Printed in Japan